

地獄の釜で煮られる心

——バリ島と日本で起こった類似現象——

小 林 信 彦*

A

subtle body と見なされるバリ島の hidēp

Friederich によると、地獄の王 yama (閻魔)¹⁾ が科す罰として、「数千年にもわたって靈魂を銅の釜で煮ること」がバリ島でよく知られています。Met zijne strenge straffen (b. v. 't koken eener ziel in een koperen ketel voor duizenden van jaren) is men zeer bekend²⁾.

バリ島の悪党が死ぬと、その hidēp (靈魂) は身体を欠いたまま単独で移動して地獄へ行き、物理的な力を加えられて苦痛を感じるのです。“hidēp” という語は、古代ジャワ/バリ語でインドの “ātman” を訳するのに選ばれた語の一つです³⁾。この語の意味は “the mind as the seat of cognition (knowledge, experience, sensation)” と定義されています⁴⁾。

インド文化の立場から見ますと、苦痛を感じるのは身体の一部である感覚器官があつてのことですから、バリ島の hidēp が身体を伴わない純粹の心であるなら、苦痛を感じるはずがありません。インド人自身が構想した心は物体と対立するものですから、物理的な力が及ぶことはありえません。そうしますと、強い熱を加えられて苦痛を感じるバリ島の hidēp は、純粹の心ではなく特殊な状態の身体ということになりましょう。この点に言及して、Zoetmulder は “after death it is considered as a subtle body” と言って⁵⁾、バリ島で構想さ

*本学文学部

1) バリ島で yama は “sañ hyañ dharma” (正義) または “preta-rāja” (死者の王) とも呼ばれ、死の神であり懲罰の神です。バリ島の yama は最高神 siwa と同一視されています。礼拝されることがあるとしても、yama の名で siwa が礼拝されるに過ぎないのです。

2) R. Friederich, “Voorloopig verslag van het Eiland Bali” [(1)], *Verhandelingen Bataviaasch Genootschap* 22, 1849, Siva's attributen, p. 41.

3) P. J. Zoetmulder, *Kalangwan, A Survey of Old Javanese Literature*, The Hague, 1974, p. 182.

4) P. J. Zoetmulder, “hidēp”, *Old Javanese-English Dictionary*, 's-Gravenhage, 1982, p. 623.

インドでは象徴によって究極の存在を理解しようとする試みが brāhmana の時代からあり、これが upaniṣad にも継承されて、この問題が話題になる中で vāyu (息) と śabda (言葉) と共に取り上げられたのは、manas (心) でありました。

これを受けて、バリ島でも bāyu (息) と śabda (言葉) と共に、hidēp が取り上げられ、この三点セットを指して “tri-śakti” (三つの) という言葉が用いられました (Roelof Goris, *Bijdrage tot de kennis der oud-Javaansche en Balineesche theologie*, Leiden, 1926, pp. 58-59.

5) *ibid.*, “ātma/ātma”, p. 160.

れている hidēp の特殊性をよく説明しています。

生きている間、この hidēp は身体に内在し、subtle body と見なされるのは死後に限られるというのです。そして、究極的には最高存在と一つになると考えられています。It dwells in the body, which it leaves temporarily or definitely in death to go to the deity [supreme soul with which it is essentially one]⁶⁾.

問題は最高存在に近づけずに地獄へ行く場合です。死んだ身体から離脱した後、地獄では物理的な力が増えられて、苦痛を感じなければならぬはめに陥るわけですから、実態のない純粹の心というわけにもいかず、このような点も考慮して死後のみにとるべき特殊形態が構想されたのでありましょうか。いずれにしても、バリ島の hidēp はすっかりしたものではなく、はなはだ曖昧なものとならざるをえないのです。

インド文化圏でなら、このような問題は起こりません。ヒンドウイズムの ātman あるいは仏教の vijñāna (心) は身体と全く別の存在であり、それ自体が身体の機能を帯びることはありません。とは言っても、身体がなければ何にも関与できませんから、ātman や vijñāna は単独で存在することはありえず、常に身体を結合しています。

バリ島の人々が死後の hidēp を subtle body と見なさざるえなかったのは、身体と心の分離を前提とする「心の移転」をインド文化から受け入れなかったからです⁷⁾。根本の所でインドの人々と死後観を異にしているのです。バリ島の人々がインド人と似たように考え似たように行動しない以上、バリ島で昔から信じられているのは、ヒンドウイズムでもなければ仏教でもありません。

B

力仕事をしたり声を出したりする日本のタマシヒ

バリ島の hidēp と同じように、日本のタマシヒも宿るべき身体を欠いたまま地獄へ行き、したがって感覚器官を欠いたまま地獄で与えられる苦痛を感じます。バリ島の hidēp と同じように、日本のタマシヒは剥き出しのまま地獄へ行って、「沸ける釜で煮られ」るのです。

尸骸^{しがい}、草の中で爛れ^{ただ}、以て全きことなし^{また}。神識、沸ける釜で煮られ^{しかう}、而して専なることなし^{もはら}⁸⁾。

ここに見える“神識”という漢字連続は、中国人が仏教の“vijñāna”に当てたものです。仏教の vijñāna なら、身体を欠いたまま剥き出しで存在するはずがありませんし、感覚器官を欠いたまま「沸ける釜で煮られ」て苦痛を感じるはずもありません。仏教の立場から考え

6) loc. cit.

7) 小林信彦、「バリ島に伝わるサンスクリット文献 一呪文として用いられた異文化のテキスト」,(3),『桃山学院大学総合研究所紀要』30.2, 2004, pp. 20-24.

8) 空海、『三教指歸』、『日本古典文学大系』71, 東京, 1965, p. 135: 尸骸 爛草中 以無全 神識煮沸 釜 而無専

る限り、死んだ後で物理的な苦痛を与えられているとすれば、vijñāna は地獄に移っているはずで、地獄にいるなら「地獄に住む者」(narakāvāsa) の身体に侵入しているはずですが、そのことに空海が言及することはありません。日本人の空海は、中国語文献を見て覚えた「神識」を使って、仏教の vijñāna とは別のものについて語っているのです。

この漢字連続を使った際に空海の念頭にあったのは、仏教の vijñāna ではなく、日本語の「タマシヒ」でありました。日本に生まれ育った空海は、仏教の体系に親しむ機会がありませんでした⁹⁾。もともとインドの人々と死後観を異にする日本人の間で、「心の移転」を前提とする仏教が体系として受け入れられることはなかったのです。

『日本靈異記』下巻38では、編者の景戒が見た夢が語られます。景戒が死んでその遺体が焼かれている時に、タマシヒ（魂神/神識）が側で眺めています。遺体がうまく焼けないので、タマシヒが木の枝を手にして死体を突いたりひっくり返したりしているのです。ここで遺体を離脱した景戒のタマシヒは、力仕事をしているのですから、subtle body どころではありません。

景戒が身死ぬる時に、薪を積みて死ぬる身を焼く。ここに、景戒が魂神^{たましひ}、身を焼くほとりに立ちて見れば、意のごとく焼けぬなり。すなはちみづから櫛^{しもと}を取り、焼かるるおのが身を築^つ棠^{かなふくしくすぬ}き、椀^{わん}に申き、之を返し焼く¹⁰⁾。

しかも、死んだ景戒のタマシヒは夢の中で声を出して叫びます。もっとも、側にいる人はこれに反応することがありません。タマシヒの出した声は人間に聞こえないのです。

ここに、景戒が神識^{たましひ}、聲を出して叫ぶ。側らにある人の耳に、口を當てて叫ぶ。遺言を教へ語るに、その語り言う音^{こゑ}、空しくして聞かれずあれば、その人答へず¹¹⁾。

バリ島の hidēp と同じように、空海によりますと、日本のタマシヒは釜の中で加えられた高熱に強く反応します。そして、景戒によりますと、タマシヒは死体に力を加え、声を上げて叫んでいます。日本人の念頭にあるタマシヒは、subtle body の水準を越え、本格的な身体と同じ機能があるということになります。

空海や景戒に代表される日本人は、バリ島の人々と同じように、インドで構想された「心の移転」を体系として受け入れることはありませんでした。根本の所でインドの人々と死後観を異にしているのです。日本で昔から信じられているのは、インド人が構想した仏教とは無縁のものです。

C

インドの死後観を受け入れなかったバリ島と日本

現実の生活にかかわるものとして、インド人は心を構想しています。身体がなければ発声

9) 小林, 「アーヴェーシャと阿尾奢, そしてアピシャ/バク — “仏教東漸” と言われることの実態 —」, 『[桃山学院大学]国際文化論集』31, pp. 19-20.

10) 景戒, 『日本靈異記』, 小泉道 (校注), 『新潮日本古典集成』67, 東京, 1984, p. 307.

11) *ibid.*, p. 308.

器官を使って思いを伝えることができませんし、手足を動かして思っていることを実行に移すこともできません。身体は心の不可欠な用具と考えられています。

インド人にとりまして、身体と結び付かない限り、心は動くことができません。そうしますと、次の身体へ移ることができません。前の身体が死んでから次の身体が発生するまで、*ātman* や *vijñāna* は仮の身体 *antrābhava* ([前の身体と次の身体の]中間[で機能する]存在) に宿ると考えられています。死んだ身体を離脱して、目に見えない *antrābhava* に運ばれて移動します。そして、受精の直後に *kalala* (胚の原型) に侵入するのです¹²⁾。

地獄へ行った心は「地獄に住む者」の身体に侵入します。このように、移動の途中であろうと、地獄に到着した後であろうと、*ātman* や *vijñāna* が剥き出しのまま物理的な力を加えられることはありません。インドの心は身体と全く別の存在であり、それ自体が身体の機能を帯びることはありません。しかも単独で存在することはありえず、常に身体を結合しているのです。このように、ヒンドゥイズムと仏教では「心の移転」について、あらゆる場合を想定した緻密な理論体系が独自に構築されています。この体系を受け入れるということこそ、文化がインド化するということなのです。

ところが、インドの *ātman* や *vijñāna* と違って、バリ島の *hidēp* も日本のタマシヒも、死んでも身体の機能から完全に切り離されることなく、生きている人間に準じた行動をとります。これでは、バリ島の文化にも日本の文化にも、インド文化の前提を成す「心の移転」を受け入れる余地はありません。この二つの文化は何の繋がりもありませんが、インド人の死後観に馴染めないという点で、インド文化に対して似た反応を示した結果、興味深い類似現象が見られることになったのです。

学術振興会の助成による特定領域研究
「現代インドネシア社会におけるインド文化の受容」(代表 小池誠)
平成12-13年分担: 「インド文化受容に関する文献学的研究」

12) 小林, 「古代インドの文献に見られる7の数 ―セム語文化圏から伝わった文化要素―」, 『[桃山学院大学]人間科学』28, 2004, pp. 28-31.